

## 学 位 論 文 題 名

生態学的アプローチで捉える日本語会話のダイナミクス  
－会話の場の〈赴き〉を基盤とする〔知覚－行為〕と認知的理解－

## 学位論文内容の要旨

本稿の目的は、会話の場と参与者との関係性を、環境と主体との関係性として生態学的に捉え直し、分析・考察すべく、会話に参加する主体として我々が備えるべき諸側面を、互いに関連し合い機能することを前提として包括的に記述することにある。そこで本稿では、日本人3～4名による多人数会話を分析の対象とし、会話という多様な可能性に満ちた複雑な一つのシステムの中に組み込まれた主体的な参与者の本質と、それを反映した会話のダイナミクスについて考察する。

第Ⅰ章では、本論を支える最も重要な理論的基盤となる生態心理学について概観する。生態心理学の中心的課題は、多種多様な行為を実践する主体性を備えた我々人間や動物（主体／有機体）と周囲の環境との間で、どのような関わり合いが起こっているのか、我々主体が変化し続ける環境との関係性をどのようにバランスよく調整し、どのように適応し続けるのかを考え記述することにある。また、生態学的アプローチにおいては、主体の実践と心理が切り離されることはない。周囲の環境で起こるめまぐるしい変化の中で、我々は実践と心理の循環的な連携によって当該の環境へと適応するために自らの在り方を調整しているものと考えられる。本章では、こうした実践と心理の循環的連携の基軸となる〔知覚－行為〕システムをはじめとする生態心理学の主要概念を整理し、本稿における会話の分析・考察に必要な道具立てと理論的な基盤を整える。さらに、本稿で扱う会話事例について、その会話の場に実在する様々な〈物〉にも注目し、その様相を〔自己－他者－物〕によって構成される動的な三項関係相互行為として位置づける。

第Ⅱ章では、会話という活動を構成する主たる要素である発話、特に発話される言語が媒介する意味論的／語用論的な意味／機能とその認知的理解について、言語学的な視点からの議論を概観し、本稿の生態学的アプローチによる分析と考察を補完する有益な知見を得る。まずは、発話を中心とする一つの出来事／事態が内包する言語機能的・言語媒介的諸関係を各聴者が自らの主体性に依拠して認知的に把握するという発話事態認知を巡る議論について検討する。また、各聴者がそうして把握される言語媒介的諸関係のうち、いずれに対しても反応を返すことが可能であるということ、具体的な事例の分析を通して確認し、一つの発話が引き起こす次なる展開が、その発話を理解する聴者の主体性に依拠して自ずと多様化するということを示す。次に、発話を理解する上で不可欠なコンテキストを巡る（社会）語用論的・言語人類学的な議論を概観する。そして、発話はコンテキストの指標性と象徴性に由来し、様々な〈意味〉と〈効力〉が同時に発現しうること、発話を理解する際のコンテキスト化には前提的側面と創出的側面があることなどを確認し、これらの事実と会話の動的な構築過程との関連について明らかにする。本章の最後には、発話の理解によって得られる情報の本質についてさらに詳しく分析・考察し、主体の行為の調整に利用されうるエコロジカルな側面や、発話が媒介する「今、ここ」には実在しない環境状況・思考・信念などの情報が会話の場にもたらす多様な可能性

と複雑さについて論じる。

第Ⅲ章では、第Ⅰ章で述べた生態心理学による議論に、第Ⅱ章で述べた認知論的、語用論的な議論を有機的に統合し、会話の場と実践、そして各主体の認知状況を一つの生態学的なシステムとして包括的に捉え、分析・考察する。特に、言語の機能、すなわち、過去や未来の状況、および可能的、仮說的、虚構的な状態を現実の「今、ここ」に関連させることが、我々の会話にどのような展開をもたらすのかに注目し、我々の行為にかかる予期的制御を発展的に捉え直す議論を試みる。まず、生態学的なアプローチから改めて人間の行為の特性を確認し、それらを手がかりに主体による行為の予期的制御について検討する。会話を実践する上では、各参加者の行為の選択にかかる「迷い」や「躊躇」が、協応の「淀み」となって現れることも少なくない。しかし、多様な可能性に開かれた会話の場において、ある程度の試行錯誤の必要性を認めるならば、各試行の成功／不成功を直接的に示す「淀み」の存在は重要であり、その意味では、他の参加者の行為をガイドする事象としてエコロジカルな意味を持つとも考えられる。本章では、こうした行為の「淀み」に注目し、各主体に固有の経験と学びによって裏打ちされた各主体の予期的制御の様相を具体的な事例の分析を通して考察する。次に、会話の場に起こる各行為を意味づける上で不可欠な「理解の枠」の組織化について述べる。自らの行為の調整だけでなく、他者の行為を意味づけるためにそれを組織化された理解の枠に埋め込み意味づけることも重要である。これは第Ⅱ章で述べるコンテクスト化とも深く関連し、多種多様な出来事の理解に不可欠な、活動の場の全体的、状況依存的な把握の必要性を示唆していると言える。そして最後に、この会話の場の全体的、状況依存的な把握について試論を展開する。各主体は、自己の全体的意識の範囲で獲得される知覚的、および認知的な情報を統合し、エコロジカルに（それゆえ主体的に）組織化された会話の場の現状を常に想定しているものと考えられる。本章では、会話の場に集い、会話を実践する参加者として備えるべき意識的基盤を〈赴き〉と呼び、本稿独自の概念として提唱する。そして、この〈赴き〉の必要性／有用性を具体的な事例の分析を通して検証し、会話の場の複雑化を回避し活動を効率よく円滑に共創する上で、〈赴き〉の適切な調整・更新が重要であることを主張する。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 下 好 孝  
副 査 教 授 佐 藤 俊 一  
副 査 教 授 山 田 義 裕

## 学 位 論 文 題 名

### 生態学的アプローチで捉える日本語会話のダイナミクス — 会話の場の〈赴き〉を基盤とする〔知覚—行為〕と認知的理解—

本論文は、人や動物（主体）が周囲の環境へ適応する過程について議論する生態心理学の理論に言語学、人類学、認知科学の知見を統合し、会話の複雑で動的な側面を一つのダイナミックなシステムとして包括的に記述、説明したものである。生態心理学では、従来人間の活動が「実践」と「心理」に分離され、それぞれ行動学と心理学によって個別に議論されてきた背景を批判し、「環境について知り、環境の中で動く」という連鎖をそれ以上還元できない〔知覚—行為〕システムとして捉え直した。生態心理学は、その〔知覚—行為〕システムを主軸に、人間の活動を心と体の両者を駆使した環境への適応過程として理解しようとするものである。本論文ではこうした生態学的アプローチから、他者を相手として取る相互主体的／間主観的な環境への適応過程として会話を捉え直す試みが行われている。ただし、会話研究は、これまでは言語学的なアプローチによって研究されることが多く、これまでの多くの有益な知見が挙げられてきた。一方、生態心理学では言語をはじめとする記号の認知的な理解について十分に議論されているわけではない。こうした背景を踏まえ、本論文では生態学的アプローチを基盤としつつ、さらに会話に関する他の学問分野における知見をも補完的に応用した学際的な議論が展開されている。また、ビデオカメラで収録された具体的な会話事例の観察・分析に基づく実証的な研究手法が採用されていることも本論文の特徴の一つである。

研究の結果から、本論文の著者は次のように主張している。会話の参加者は、単なる〔知覚—行為〕の主体であるだけでなく、言語的な発話を認知的に理解し様々な意味を見出す主体でもある。そうした〔知覚—行為〕と認知的理解の両者を駆使することで情報源となる環境を個々の経験や記憶、または予期／予測といった認知領域にまで広げることにより、会話がより多様な可能性に開かれた活動となっている。しかし、それにも関わらず、各参加者は、試行錯誤的に互いの行為を委ね、支え合い、他者との協応を実現することで、会話の場に適応している。さらに最終的には、会話の成立を目指して複雑に関わり合う諸活動の制御／調整を支える〈赴き〉なる意識的基盤の存在と有用性が示唆された。

審査の結果、審査担当者は次の三点において、本論文の意義を認めるものである。

第一に、生態学的観点から、生態心理学における議論を会話研究へと応用する試みに成功した意義は大きい。これまでの生態心理学では「個と環境（主体と物）」との関係に

主な焦点が当てられており、本論文のように「個と個（自己と他者）」、および「個と個」に物を加えた三項関係相互行為にまで本格的に生態学的アプローチを採用した研究は他に類を見ない。本論文におけるこの意欲的・野心的な試みを通して、我々の相互行為の特性を明らかにする上で、生態学的アプローチが有効であるという主張が経験的に実証されている。これは今後の相互行為論に新たな視点を提供し、当該分野のさらなる発展を支える大きな成果として高く評価すべきである。

第二に、言語学的観点から、本論文の包括的な分析と考察によって、これまでの言語学的な研究による知見が、会話のある一側面を説明するものとして適切に捉え直されたことには、大きな意義が認められる。本論文は、発話を基調とする会話を言語行為の一種として安易に捉えるのではなく、あくまで人間の本質的な特性を反映した適応活動として捉え、言語使用の意義を改めて問い直し、〔知覚-行為〕を含む多様な活動との相関関係を明らかにした。発話の認知的理解を、行為の調整に利用される情報抽出過程の一種として生態学的に捉え直したことは、言語学、特に語用論的な議論に新鮮かつ有意義な知見を提供するものと期待される。

第三に、学際的研究の観点から、生態心理学、言語学、人類学、認知科学等の知見を統合した包括的な分析・記述の意義や独創性については、もはや言うまでもない。特に本論文の実証的・経験的手法によって得られた〈赴き〉という概念は、現象学や哲学における思弁的手法によって得られた諸概念にも通ずるものがある。また、本論文によって明らかにされた参与者の主体性とそれを反映した諸現象の記述は、インタラクティブ・ロボットの開発などの新興分野を支える基盤研究としての意義も大きい。本論文の萌芽的・挑戦的な主張にはいくつかの課題も残されているが、本論文の実証的な議論は、その主張の重要性を示すのに十分なレベルに達していると言える。今後に向けての興味深い問題提起を含むという点でも、本論文の学際的な発展性は高く評価すべきである。

以上のように、本論文は高い学術的意義を持つ物である。よって著者は、北海道大学博士（学術）の学位を授与される資格があるものと認める。